
「ゲーム」、カタルシス

鳴海歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゲーム」、カタルシス

【Nコード】

N3560BA

【作者名】

鳴海歩

【あらすじ】

幼い頃、「ゲーム」と称し父母を男三人組に殺された、綾嶺京介^{あやみねきょうすけ}、誠司^{せいじ}、真崎^{まざき}の三人。京介と誠司は同居し、真崎は中学の関係で安アパートに独り暮らしで、兄から仕送りを貰う、という生活を送っていた。

ある日、真崎の近所で殺人が起こる。ミステリー好きの真崎は、興味本意で捜査を開始するが、被害者は「ゲーム」の参加者の一人だった。そして、現場にあった思い出のマークを目にした時、兄と弟の、絆の戦いが始まる…

サスペンスです。拙い所がいっぱいですが、ご了承ください。

プロローグ 〰とある兄弟の絆〰（前書き）

どうも！新連載です！よろしく願います！

プロローグ　とある兄弟の絆

「兄さん、何書いてるんだ？」

「兄ちゃん？」

「ちょっと待て、今書いてるんだ。…出来た。」

「これは？」

「俺たちの絆の証だ。」

「…痛いよ兄さん。」

「う、うるさい。」

「円が3つ横に並んで、真ん中に線…」

「忘れんなよ。これ。」

「まあ、良いかな。」

「うん！」

「よし！約束だ！」

「」「指切りげんまん嘘ついたら」「」

「ひい！ゆ、許してくれ…」

何処かわからない、暗い屋内で、傷ついた男が叫ぶ。その声は屋内を反響した。

「そういう俺らの親に、お前らは何をした！」

大柄な男は声を張り上げる。その声には憤怒の色がこもっていた。

「まあまあ兄さん、落ち着いて。」

もう一人の、今度は背の高い男が、落ち着いた声で言った。背の高い男は傷ついた男の側に行き、こう言った。

「なあ。君はどう殺されたい？」

「へ？」

「全身の打撲で死ぬか、全身の刺し傷で死ぬか。」

そういった時、大柄な男は手を鳴らし、背の高い男は懐からナイフを取り出した。

「ひ、ひいいいいい！」

「どうした？つまり…どっちもか？」

「そういう事だね。」

「あ…違…グッ！」

「悪いね。声うるさいから…」

男は手で口元を押さえた。

「それじゃあ…」

「「死ね。」」

プロローグ 〽とある兄弟の絆〽（後書き）

これから真崎の活躍を描きますが、実はモデルは自分です（笑）

A c t . 1 日常（前書き）

すいません！前後書きで完全に主人公の名前ネタバレしました！

Act・1 日常

「遅刻だ！まずい！」

あやみねまさき

綾嶺真崎は朝8時の歩道を一心不乱に走っていた。学校が始まるのは8時半。学校まで要する時間は四十分である。かなり長い間走っているのか、額には脂汗が浮かんでいた。

今は七月。朝から蝉がうるさく鳴く。あと一週間で夏休みという時期で、学校では期末試験が行われる日であった。

「さすがに単位落として補習は勘弁だ。夏休みにはやりたい事があるからな。」

と、夏休みが待ち遠しいように言った。

「こういう時ってその曲がり角で美少女とぶつかるのが常だよな……まああるわけ無いけど……」

という事を呟きながら、真崎は曲がり角に入った時、盛大な打撃音と共に激しい頭痛が響き、しりもちをついた。

（っ……まさか、来た？！ありがとう！神様！）

下心丸出しの声で真崎は立ち上がり手を差し出した。

「大丈夫ですか？」

「……あ。」

「翔！」

「真崎！」

「「お前かよ。」」

「「つたく、ぬか喜びさせやがって…」」

「そりゃこっちのセリフだ。」

荒泉翔は、^{あらいずみしやう}さも憎らしそうに真崎を睨んだ。どうやら真崎と同じ考えだったようだ。

「あ、ヤバイ！もう時間だよ！」

「そうだ！今日試験じゃんか！」

「俺は今度補習受けたら親父に殺されるんだ！遅刻出来ねえ！」

「そうか…墓は見晴らしのいい丘に立ててやるよ。」

「おいおい！…いや、でも墓石には俺の名は刻みたくなえなあ。」

「諦めろ、もう遅い。ちゃんと勉強するんだったな。」

「お前に言われたくなえ。」

「馬鹿言え、俺はしなくても点取ってるぞ。翔。」

真崎と翔は格好をつけた会話をしながら、学校へ向かった。

「ギリギリ間に合ったな」

「なあ真崎。問3の二番の答え、何？」

「『ア』だろ。」

「そっか、良かった。」

翔は胸を撫で下ろした。

「一個問題間違えたの確定だな……」

「おいこら。」

「何やってんの？二人共。」

「おおこれはこれは篠原璃佳殿。しのはらりかこの俺にんの用ですかな？」

「鼻の下伸ばすのもいい加減にしろ。象かお前は。」

「俺の象はもつとでかいの。」

「ぶん殴るぞ。」

「なんの話してるの？」

「ああ気にすんな。で、なんか用？」

「うん。早速だけど、荒泉くん補習だつて。」

「なにいいい！」

「名前でも書いてなかったんだろ。」

「え、うん。なんでわかったの？」

「別に。ま、どうせ書いても補習だろうが。」

「なんだと？」

「否定しきれんのか？」

「…できねえなあ。」

翔は少し考えて言った。流石に自覚はしていたようだ。

「真崎はどうだった？」

「名前で呼ぶな、『篠原』。」

「あ、ごめん。『綾嶺君』はどうだった？」

「さあな。」

「でも最初は綾嶺君の得意な国語でしょ？」

「じゃあ言わなくてもわかるだろ。」

「そうだね。」

と言って璃佳はクスリと笑った。その顔を直視できず、真崎は立ち上がった。

「いくぞ、翔。」

「んあ？」

「購買でコーラ買っただろ？」

「ああ……」

「なにニヤニヤしてんだよ。」

「別に。」

真崎と翔は財布を持って購買へ向かった。翔は真崎を茶化しつつ、コーラを買ったのであった。

「あ、兄貴！」

学校が終わり、翔との下校中、真崎は喫茶店にいる兄、京介きょうすけと誠司せいじに会った。京介は大きい体つきをしていて、誠司は背が高い男だった。

「よう、真崎。久しぶりだな。」

「どうだい？学校は。」

誠司が真崎にたずねた。

「ああ、楽しいよ。やっぱり友達がいた方が楽しいし……」

「そうか……ごめんな、無理させて……」

「そんな……」

「真崎。その人たちは？」

翔が真崎の後ろから訊いた。

「誰だい？」

「ああ、紹介するよ。友達の荒泉翔だ。」

「荒泉翔です。初めまして。」

翔は深々と頭を下げた。

「どうも、兄の誠司です。」

「同じく、兄の京介です。」

誠司と京介も同じように頭を下げる。

「真崎にも友達ができたか…」

「あの、ね…」

「あの、って言うな。まるで俺が孤独だったみたいじゃないか。」

真崎は子供のように口を尖らせた。だが、久しぶりに兄に会ったのか、その顔はとても輝いていた。

「ははは、すまんすまん。」

「なににせよ、俺はもう大丈夫さ。一人でもやっていけるよ、仕送

りさえあれば。」

「そうか…それを聞いて安心したよ。」

誠司は急に神妙な顔になり、そう呟いた。

「誠司兄さん？」

「真崎、これからも頑張れよ。」

「兄貴？」

「じゃあな。」

「あ、うん。じゃあ…」

京介と誠司は、まるで真崎を捨てたかのように、早々に駅へと向かった。真崎はその後ろ姿に、なんとなく不安を覚えたのだった。

「ん？」

翔と別れた真崎は、自宅に向かう途中で路地裏の方に人だかりを発見した。何事かと思っけて行くと、そこでは警察が地下駐車を封鎖していた。

「なにがあつたんだ？」

「殺人らしいよ。」

「家の近所で？こわーい。」

野次馬がガヤガヤと騒ぐ。真崎は人混みをすり抜け、現場を覗いた。死体に沿つて書かれた白線のすぐそばに、それとは違つ白く描かれたマークがあつた。

「3つ並んだ円の真ん中に線……」

それは、幼い頃の兄たちとの、絆のマークだった。

A c t . 1 日常（後書き）

まあとりあえず真崎はツンデレということでもいいかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3560ba/>

「ゲーム」、カタルシス

2012年1月10日21時55分発行